
異世界でケモノっ娘とイチャイチャしたい！

ひえー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でケモノっ娘とイチャイチャしたい！

【Nコード】

N2791W

【作者名】

ひえー

【あらすじ】

ケモノミミが好きすぎる高校生、神崎隼人。

周囲から引かれるほどケモノミミが好きな彼は、ある日電車に轢かれて死んでしまう。

別に神様と会うわけでもなく、目が覚めた先は異世界だった。

けっこう強力な能力を身に付けた彼が目指すはケモノっ娘とのイチャイチャ生活！？

プロローグ（前書き）

ノリで書いてみました。

作者もケモノミミ大好きです。みなさんもケモノミミ好きですよね？
え、違う………？！

プロローグ

青年、神崎 隼人は変人である。

少々長めの黒髪に、吊りあがった黒眼、そしてかなり端正な顔立ち。ルックスも良く、身長は180センチを優に超えているだろう。

モデルと間違えられてもおかしくなさそうな外見だ。

現在、彼は自宅からさほど離れていない公立高校に通っている学生であるが、成績優秀で運動神経抜群。

まさに非の打ちどころがないとはこのことだ。

ではなぜ、周囲から彼が変人と呼ばれているのか。

それは、彼の極端なまでの趣味——本人曰く、生き甲斐であるらしいが、そのせいである。

その趣味とは、彼の見た目からは想像できないオタク趣味であった。彼が持っているアニメやギャルゲーなどの類の知識は凄まじく、クラスで自分の知識や経験を雄弁に自慢している自称オタク達を黙り込ませるほどである。

中でも、ネコミミやイヌミミといったケモノミミと呼ばれるジャンルへの熱意は群を抜いてるといえよう。

高校へ入学して1か月ほど経った頃、彼に告白してきた同クラスの女子が居た。

学園一……とまでは言わないが、新人生美女ランキング（出席番号

19番田中の調査）トップ5に入っていた少女である。

その話を聞いた誰もが二人が付き合うことを確信していた。

美男美女が並ぶその姿は、見ている側からしてみれば異常なほど絵になっていたからだ。

しかしそこで彼はその異常な趣味の片鱗を周囲に見せつけることになる。

「気持ちには嬉しいけど、ケモノミミが生えてない女の子とは付き合えないんだ。恨むなら、君の両親がただの人間だったことを恨んでね」

これである。

そんなふざけた理由で断られた少女は啞然とした表情でその場に立ちつくしたままだったが、本人は何の興味もなさそうに欠伸をしながら教室に戻っていった。

この話が学園中に広まり、彼は周囲から変人というレッテルを貼られることになったのだった。

さて、そんなこんなで場所は彼が通う高校の教室。

放課後のチャイムが鳴るなり、未だホームルームを続ける担任を無視して隼人は教室を走り去る。

後ろからかけられる静止の声も聞かず、彼は段飛ばしで階段を駆け下りていく。

昇降口に辿り着くが、通学靴に履き替えるでもなく上履きのまま外へ飛び出し、校門を潜って自宅への道突き進む。

「クソッ！クソッ！　なんてノロマなんだ俺の足は！　こんなもんじゃねえ、こんなもんじゃねえだろうがああああ！！」

さらにスピードを上げ、前方を走っていたママチャリに乗ったおばさんを追い抜く。

そのあまりのスピードにおばさんがぎょつとした顔で隼人のほうを見るが、真剣な表情をした彼はそれに気づかない。

彼が何故そこまで急いでいるのか。

それは、今日自宅に届いているはずの郵便物のためである。

“おネコ様といっしょ☆ぱあとっ”

ギャルゲーと呼ばれるジャンルのゲームである。

このゲームの発売日を制作発表の段階から今か今かと楽しみに待ち続けてきた。

おネコ様と一緒にシリーズは、隼人をオタク道に進ませた元凶のゲームである。

中学に入りたての頃は、サッカー部に所属しているどこにでもいるスポーツマンだった。

ふとしたきっかけで友人からこのゲームを借りてプレイしたところ、ドハマリしたのである。

今回発売されたおネコ様といっしょ☆ぱあとっは、前作のネコミ

ミヒロイン達との後日談に加え、
イヌミミ星とキツネミミ星からやってきた新ヒロインを追加した前作にも劣らないボリウムを誇る。

ケモノミミ至上主義を冠する彼にとって、今作のゲームは何物にも代え難いシロモノであることはお分かりいただけたらと思う。

発売日の延期に次ぐ延期。ホームページ上で延期のお知らせというトピックが表示される度にディスプレイを粉々に叩き割りたくなる衝動に駆られた。

それが今日、ようやく自分の家に届くのだ。

やる気が微塵にも感じられない中年教師の与太話に付き合って時間を浪費させるなど言語道断である。

「神は俺を見放したか……」

この街に唯一存在する踏切が、戦場へと急ぐ彼の前で無情にも閉ざされる。

いつもならケモノミミ少女が登場するラノベを読みながら帰宅するため、踏切の待ち時間など気にも留めないが、今の彼にとって時間を1秒たりとも無駄にするわけにはいかなかった。

迷いなく踏切を潜り、線路を横切ろうとするが、急いでいたために線路の溝に足を取られてつまづく。

大きくバランスを崩して前のめりに地面に手をついてしまう。

勢いよく手をついたために手のひらがじんと痛む。

そして近づいてくる電車の音。

なんとか立ち上がろうと必死にもがくものの、パニックになってい

る上につまづいた時に足首を捻ってしまったようでうまく立ち上がることが出来ない。

ふと顔を上げれば、まだ遠くにあると思っていた電車が目と鼻の先にまで接近していた。

（やば……これは死んだかも）

妙に冷めた頭でそんなことを考えている時、体がバラバラになりそうな衝撃に襲われた。

不思議と痛みは感じなかったが、目の前が真っ暗になる。

暗闇の中でだんだんと薄れていく意識の中で、彼は最後に天国にもパソコンとケモノミミ文化があることを切実に願ったのだった。

プロローグ（後書き）

誤字・脱字ありましたらご報告お願いします。
みなさんからのご感想お待ちしております。

第1話（前書き）

主人公はイケメンなのにオタクな残念な人です。
よって発言や性格などで気分を害されるかもしれません。

第1話

「知らない天井……って、あれ？」

目を覚ましてまず最初に見えたのは雲一つない美しい青空。

青空が見えるのだから天井などあるわけもない。

いや、空こそが地上で生きる生物にとって未来永劫破ることの出来ない天井なのか。

うーむ、哲学だね。

そんな馬鹿げたことを考える頭を振って立ち上がる。

周囲は見渡す限りの木、木、木……いわゆる森というやつですな。

いやそんなことよりだね。

「俺ってたしか、電車で轢かれた……よな？　なんで森の中に……それに体に傷一つないし」

自分の体をペタペタと触ってみるものの、とくに外傷は見つけられない。

思い切って体を動かしても問題ない、というよりも前より体が軽くなってるんだが……。

試しにその場で軽くジャンプをしてみると、5、6メートルは跳んだ。

「……………俺、いつのまに人間やめたんだ」

冗談抜きにかなり落ち込んだ。

これでもめっちゃくちや軽く跳んだつもりなんだが。

本気で跳べばどれくらい高くまで跳べるのか気になったが、軽く跳んだだけであれなんだ。あまりにも高く跳びすぎて着地に失敗して怪我なんてしたら笑えないのでやめておく。

まあ自分の身体能力の不自然な向上は置いてだな、今は状況把握に努めないと。

先ほと言ったように周囲は木々が生い茂っているだけ。それ以外にはほんとに何も無い。

これってもしかしなくても遭難だよな。

とりあえず持ち物の確認をしよう。

・高校のブレザー（うん、動きやすいけど少なくともこんな森の中に入っていくような服装じゃないね。毒蛇とか居たらシャレにならん）

・財布（中には2万とちよつと…。現時点では糞の役にも立たないな。いや、札なら尻くらい拭けるだろうけど、人がいるところまで出れば色々使えるだろ）

・携帯電話 （圏外か。 森の中だとしても少しくらい入ってもおかしくないんだが……富士の樹海じゃないよな……………）

・通学カバン （筆箱が一つと教科書とノートが何冊かある。 勉強自体は嫌いじゃないが、流石に遭難中にまでやる気は起きん）

と、まあこのくらいか……。

今の状況を打開できるようなものはないな。せめて学食のパンでも入ってたらよかったんだけど……。

「はあ……………。ほんとにどうするよ、この状況」

改めて辺りを見渡してみると、あることに気が付いた。

生えている木々が日本では見たこともないような種類ばかりなのだ。

（まさか外国…………？ 電車の事故に遭った俺を、誰かが拉致してここまで連れてきた…………のか？ いやいや、非現実的すぎる。そんなことしても相手さんには何のメリットもない）

ため息をついて近くにあった切り株へと腰を下ろす。
おお、いい感じの切り株だな。木の材質が柔らかいせいかな、座り心地も結構いいぞ。

ん……？ 切り株………？

「もしか……？」

座っていた切り株の断面を見ると、明らかに人為的に切断されたような滑らかな断面。

つまりこの森には人が出入りしているということだ。
まったく無人の土地じゃないと分かっただけでもすごく有り難い。

少し歩けば人里に辿り着けるかもしれないな。

「よし、そうと決まれば早速行動だ。善は急げ、ってね。ちなみに急がば回れという文字は俺の辞書にはないよ」

それに、早く家に帰っておネコ様とイチヤイチャしたいからね。

☆★☆☆☆☆☆☆

歩きはじめて1時間は経つが、一向に人里に辿り着けない。

不思議と肉体的な疲れは感じないが、メンタルはガリガリと削られていつて。

とりあえず人じゃなくてもいいから、生き物と触れ合いたい……。

だってここまで歩いてきた中で野生動物と一回も遭遇してないんだよ？

確かに野生動物は警戒心が強いから人前にはなかなか姿を現さないけど、気配まで感じないっていうのはおかしい。

小鹿さんなんか見たら一気に元気になる自信があるんだけどなあ。

シカミミと言えば最初に思いつくのはせ〇とくんだ。

あいつは俺に喧嘩を売っているとしか思えない。萌えないケモノミミなんか見たのは初めてだ！

いや、あれは角か……？

それならまあ10000歩譲って許すでしょうか。

とにかく頼む小鹿さん……！君のその愛らしい姿を私に見せておくれ……！

ガサガサッ

すると、近くの茂みから音が聞こえてきた。

ま、まさか、俺の願いが天に届いたのか……！？

踏切の時は見捨ててくれやがったが、今回のでプラスマイナス0にしてやろう！

命の危険があったのに随分軽いな、だって？ でも一人はほんとに辛いんだもの。

さあ小鹿さん！こっちに出ておい……で…………？

『グルルルル………』

「あるー日ー、森の中ー、クマさんにー、出会ったー」

思わず歌ってしまうほど混乱しているが、分かりやすく状況を説明するぜ！

俺、人里を目指して森を探索

←

さびしいよー！ 小鹿さん出てきてー！

←

クマさん「呼んだ？」

こんなところだ。

………って、やばくね？

電車との衝突死を回避したと思ったら、クマさんにぶつ殺されるフラグが建ったんだけど……。

フラグ二級建築士は、不幸条さんで十分です！！

ああ、そうこうしている間にもクマさんが雄叫びを上げながら俺に突進してきてるよ……

クマミミ少女は好物だが、リアルクマさんは正直勘弁してほしい。クマの肉って筋が固いし、匂いもキツイんだよなあ。

……現実逃避は後にしよう。

とりあえずクマ！ お前はクマ鍋決定じゃー！！
もちろん俺は食わん！ 後々出て来る小鹿さんにプレゼントだ！

あ、鹿って草食だったか……………。

第1話（後書き）

次回は初戦闘です。

戦闘描写なんてあまり書いたことがないので難産になるかと思いますが、

生温かい目で見守ってやってください。

第2話（前書き）

お気に入りポツポツと増えてます。

まだ盛り上がりどころなんて一つもないのに……こんな拙作をお気に入りに登録していただけるのは感激の極みです。

第2話

さて、目の前には俺に向かって突進してきているクマさんの姿。

……てかこのクマでかすぎるだろ。

体長が優に5〜6メートルはあるんじゃないか。

グリズリーサイズのクマだ。一発でもまともに食らえばシャレにならない。

慌てて真横に跳んで避けるが、思っていたよりも跳びすぎて生えていた木にぶつかってしまう。

「ぐっ……！」

肺がつまって一瞬呼吸が止まりそうになるものの、なんとか体勢を立て直して再びクマと対峙する。

クマは人間如きに避けられたことに怒っているのか、先ほどよりも勢いをつけて突進してくる。

再度避けようとするものの、先ほどの衝撃で体がふらふらと揺れてうまく動くことが出来ない。

突然、脇腹に凄まじい痛みが走る。

「があッ……………!?!?」

見ると脇腹が裂かれ、かなりの量の血が出てしまっている。

恐らくクマの爪牙を避けきれなかったのだろう。

(これは…………流石に、まずいな……………)

思わず膝をついてしまう。

その隙をクマが見逃すはずもなく、膝をつく俺に向かって鋭い爪牙を突き立てようと迫る。

(素手で防ぐのはどう考えても無理か…………!　せめてなにかしらの武器があれば…………)

まさに絶体絶命の状況。

この最悪な状況から逃れるために願うのは一振りの、剣。

強敵を退け、使い手の身を守る天下無双の剣。

その願いに応じるように、後ろに伸びていた自分の影が目の前に集まる。

そして、歪な音を立てながら剣の形を象っていく。

目の前に現れた漆黒の剣。

慌ててそれを手に取り、迫りくる爪牙を剣の腹で防ぐ。

数百キロはありそうなクマの一撃を剣で防いだことにより腕が吹き飛ばされそうな衝撃に襲われるが、骨が砕けなかったただけマシだと思いたい。

そのまま切っ先をクマの肩へと向け、素早く剣を一閃する。

シュッ！

まるで豆腐でも切るかのように容易にクマの腕が地面に落ちる。切り落とされた肩からはクマの鮮血が止めどなく溢れ出ており、クマは悲鳴のような鳴き声をあげることしかできない。

「はっ！」

苦しみの声を上げるクマの首元に剣を突き立てる。

クマの首の骨が砕ける音と共に、突き立てた剣は吸い込まれるように貫通した。

『ガホッ……グボボボボ………』

口から血の泡を吹きながら、その巨体は地面に沈んだ。

しばらく痙攣していたが、次第に動きが小さくなり遂には動かなくなった。

「やった…のか……？」

戦闘時の興奮で忘れていた痛みが再び体を襲い、その場に腰をついてしまう。

「ぐっ、痛ってえ……。それにしても……」

自分の影から現れた黒い剣を見つめる。

剣など一度も使ったことなどないにも関わらず、長年使ってきた物のように握っている手によく馴染む。

先ほど武器が欲しいと念じたところ、自分の影から剣が創造された。それならば、と近くの木の影を見つめて手元にある剣をイメージする。

ズズズ……………

そして創造されるまったく同じ形の剣。

自分以外の影からも創造できるのか。

試しに銃をイメージして創造してみたが、思った通り弾は出ない。これは銃の構造まできちんとイメージできていなかったということだろう。

変にいじって暴発でもしたらたまらないのですぐに元の影に戻す。

頑張ればエアガンくらい作れそうなものだが、そんなもの作っても仕方ないので却下。

まあこんな森の中でサバゲーでもしたら楽しそうだけどな。でもまたさっきみたいな危険な野生動物に襲われでもしたら目も当てられない。

とっと人里へ向かって傷の治療をしないとな。

血の海に沈むクマを一瞥して、出発しようかと思ったその時――

「その人間、止まれ！」

振り返ればこちらに向けて剣を構える3人組の姿があった。

よ、ようやく人に会えた！

くそっ……嬉しすぎて涙が出そうだ。

目の前の3人組の姿を改めて確認する。

オレンジ色のツンツン髪の男。歳は俺と一緒にくらいか。
身長は俺より少し低いが、体はかなり鍛えてるみたいだ。

次に、先ほどのツンツン髪の男と同じオレンジ色の髪をした少女。髪を後ろでポニーテールに纏めている。

歳は自分より2つか3つ下だろう。隣の男と顔つきが似ているが、兄妹か何かだろうか。

最後に、青髪のショートカットの女の子。この中で身長が一番低いな……歳は小学校を卒業したかしてないくらいだろう。

強気の2人とは対照的に怯えた表情でこちらを見つめている。

俺は今、感動に打ち震えていた。

この森で初めて人間と会えたという喜びよりも格段に勝る感動。

それは、俺を取り囲んで剣を構えている3人の少年少女、その全員の頭にネコミミがついていることだ!!

「うおおあああああああああああああ!!!」
生きて

てよがつ だあ あ あ ！！！！！！！」

知らず知らずのうちに流れ出る涙をボロボロと零し、脇腹の怪我も忘れて、天高く両手を突き上げたのだった。

第2話（後書き）

初戦闘でした。

描写の力不足感が否めない……

誤字・脱字ありましたらご報告お願いします。
みなさんからの感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2791w/>

異世界でケモノっ娘とイチャイチャしたい！

2011年10月9日16時00分発行